

運動部活動における動機づけ雰囲気と部員を取り巻く周囲からの 期待感が試合前の不安に与える影響

中須賀 巧*

阪田俊輔** 田中輝海***

抄録

本研究の目的は、運動部活動における動機づけ雰囲気の認知ならびに選手を取り巻く周囲からの期待に対する反応が競技不安に与える影響について検討することであった。本研究では動機づけ雰囲気の認知ならびに選手を取り巻く周囲からの期待に対する反応を独立変数に、競技不安を従属変数とした仮説モデルを設定した。運動部活動に所属する中学生 92 名（平均年齢 13.03±0.70 歳）ならびに大学生 378 名（平均年齢 19.80±1.20 歳）を対象に質問紙調査（運動部の動機づけ雰囲気測定尺度、保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度、期待への行動結果に対する親の反応尺度、スポーツ競技特性不安尺度）を実施した。モデルの妥当性検証には共分散構造分析を用いた。本研究の結果は以下に示す通りである。①中学生では、競技不安に対して、「心配-不安雰囲気 ($\beta=.25$)」が有意な正の影響を示した。②大学生では、競技不安に対して、「心配-不安雰囲気 ($\beta=.24$)」、「保護者の落胆的反応 ($\beta=.21$)」、そして「コーチの落胆的反応 ($\beta=.13$)」が有意な正の影響を示し、「学習志向雰囲気 ($\beta=-.17$)」と「チームメイトの落胆的反応 ($\beta=-.12$)」が有意な負の影響を示した。

キーワード：動機づけ雰囲気，競技不安，運動部活動，保護者，期待

* 兵庫教育大学 〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

** 九州産業大学 〒813-8503 福岡県福岡市東区松香台 2-3-1

*** 高千穂大学 〒168-8508 東京都杉並区大宮 2-19-1

The Influence of Perceived Motivational Climates and Expectation from Another person on Competitive Anxiety in Athletic Clubs

Takumi Nakasuga *

Shunsuke Sakata **

Terumi Tanaka***

Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of perceived motivational climates and expectation from another person on competitive anxiety in athletic clubs. In basic model, we defined perceived motivational climates and expectation from another person as the independent variable, competitive anxiety as the dependent variable. The participants were 92 junior high school students (mean age=13.30±0.70 years) and 378 university students (mean age=19.80±1.20 years) who completed the Motivational climates in Sport Scales, the Parent-Initiated Motivational Climate Questionnaire, the Parental Reaction at Expected Behavior and the Trait Anxiety Inventory for Sports. The validity of this model was verified using structural equation modeling. Furthermore, the results of this study suggested following processes: (1) The “Conducive-worry climate” had a positive influence on competitive anxiety (junior high school students). (2) The “Conducive-worry climate”, “Perception of disappointment in parent” and “Perception of disappointment in coach” had a negative influence on competitive anxiety, on the other hand, the “Learning-oriented climate”, “Perception of disappointment in teammate” had a positive influence on competitive anxiety (university students).

Key Words : motivational climate, competitive anxiety, athletic club, parent, expectation

* Hyogo University of Teacher Education 942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494

** Kyushu Sangyo University 2-3-1 Matsukadai Higashi-ku, Fukuoka 813-8503

*** Takachiho University 2-19-1 Oumiya, Suginami-ku, Tokyo 168-8508

1. はじめに

スポーツ競技場面において認知される不安は、競技不安と呼ばれ、「スポーツ競技における不安感や緊張感などを伴った心理的・身体的反応、およびその特性」と定義されている(橋本ほか、1993)。選手にとって競技不安は、試合中の失敗やミスといった否定的な結果を想起させ、さらにプレー前の消極的な姿勢・思考を高めると言われている(有富・外山、2017)。また、競技場面における自己効力感(自分がその行動をどの程度効果的に実行できると思っているのかという自信)が選手のパフォーマンス向上に及ぼす影響性よりも、競技不安の喚起が選手のパフォーマンスを著しく低下させる影響性の方が強いことも確認されている(高野・城、2005)。このように試合前における競技不安は、試合での失敗・敗北の想起や緊張状態の増強だけでなく、試合中の運動パフォーマンスを著しく低下させる主要因となる。また試合前の競技不安の喚起を皮切りに、選手の心身を消耗させ、望まない引退(退部)やチーム内での孤立、バーンアウトなど最悪の事態を招くケースも考えられる。これまで競技不安の喚起要因に関して検討している研究には、選手の個人内要因(感情や志向など)に注目するものが多く(津田、2013; 早乙女ほか、2016)、選手を取り巻く環境要因から競技不安への影響性についての知見は十分に得られていないのが現状である。

そこで本研究では、まず選手を取り巻く環境要因として、近年取り上げられることが増えてきた運動部活動における動機づけ雰囲気に着目する。これは重要な他者(コーチやチームメイトなど)によってつくられる雰囲気と定義され(西田・小縣、2008)、他者との比較を通しての達成を重視する成績雰囲気と学習や熟達のプロセスを重視する熟達雰囲気の2つの側面から周囲が有する目標の違いを構造的に捉えて検討することができる(Ames and Archer、1988; Seifriz et al.、1992)。伊藤(2001)は、この動機づけ雰囲気について、コーチがメインとなる「コーチの練習支援」と「コーチの能力志向」、チームメイトがメインとなる「協調」、「承認」、「競争」の5つの下位尺度からなる運動部活動場面に対応する測定尺度を開発している。そして、この尺度を用いて競技引退に対する態度との関係について検討している研究では、「承認」が競技引退に対して好意的で受容的な態度を増強させることが報告されている(中須賀ほか、2019)。他にも「コーチの能力志向」が高まるとセルハンディキャッピング方略を使用しやすい傾向にあることも確認されている(森年・

伊藤、2010)。このように運動部活動において動機づけ雰囲気をどのように認知しているのか、だれがつくる雰囲気なのかによって、選手の心理面に与える影響が異なるのではないかと考えられる。また近年の運動部活動の状況や、それに関連する研究を概観すると、選手やコーチ以外に保護者が選手の意識や行動を規定する存在としても挙げられている(安藤、2018; 井上、2010)。White et al. (1992)は、このような保護者の存在が選手の動機づけに異なる影響を示すと仮定し、Parent-Initiated Motivational Climate Questionnaire(以下、PIMCQとする)といった測定尺度を開発している。そしてLavol and Stellino (2008)は、選手に対して保護者が熟達雰囲気と接している方が、スポーツ活動中の好ましくない行動(ラフプレーやトラッシュトークなど)が抑制されることを確認している。つまり、運動部活動に関わる選手の心理面は、コーチやチームメイトがつくる動機づけ雰囲気と同様に、保護者のつく動機づけ雰囲気も重要になると考えられる。

次に、競技不安の喚起要因として、本研究では選手に対する周囲からの期待感にも注目する。先にも示したコーチ、チームメイト、そして保護者の3者からどのように期待され、どのような反応を示してもらえるのかによって、競技不安の喚起は異なるのではないかと考える。例えば、自分が期待に応えられなかった場合に保護者が落胆的な反応を示すと学校内での問題行動が抑制される(渡部ほか、2014)ことが確認されている。

以上のことから、コーチ、チームメイト、そして保護者といった3者がつくる動機づけ雰囲気を選手がどのように認知しているのか、あるいは、選手自身が期待に応えられなかった際に周囲がどのような反応を示すのか、それによって競技不安の喚起の仕方も異なることが十分想定できる。しかし、先述した3者の観点からみた動機づけ雰囲気の認知と期待に対する反応が選手の競技不安にどのような影響を与えるのかについてはこれまで検討されていない。

2. 目的

本研究では、運動部活動における動機づけ雰囲気の認知ならびに選手を取り巻く周囲からの期待に対する反応が競技不安に与える影響について検討することを目的とした。

3. 方法

3-1. 調査対象者および調査時期

運動部活動に所属する中学生ならびに大学生を対象に、201X年8月上旬から12月上旬にかけて調査を実施し、回答に欠損のなかった中学生92名(平均年齢13.03±0.70歳)と大学生378名(平均年齢19.80±1.20歳)を分析対象とした。

3-2. 調査内容

3-2-1. 基本属性

フェイスシートにて、基本的属性(性別、年齢、学年)、所属運動部について回答を求めた。

3-2-2. 運動部における動機づけ雰囲気

運動部の動機づけ雰囲気測定尺度(伊藤、2001; 森年・伊藤、2010)を用いた。この尺度は、所属する運動部活動の雰囲気を部員がどのように認知しているのかという側面を、熟達雰囲気の「コーチの練習支援」、「協調」、「承認」の3下位尺度と成績雰囲気の「コーチの能力志向」、「競争」の2下位尺度、それぞれ4項目の合計20項目で構成されている。回答は「所属している運動部活動について」当てはまる程度を「全く当てはまらない(1点)」から「とても当てはまる(6点)」の6段階で評定するものであった。

3-2-3. 保護者による運動部の動機づけ雰囲気

White et al. (1992) のPIMCQを参考に、中須賀ほか(印刷中)によって作成された保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度を用いた。この尺度は「低努力-成功雰囲気(4項目)」「心配-不安雰囲気(5項目)」「学習志向雰囲気(5項目)」の3下位尺度、合計14項目で構成されている。回答は「全然そう思わない(1点)」から「とてもそう思う(5点)」の5段階で評定するものであった。

3-2-4. 期待への行動結果に対する周囲の反応

渡部(2013)の期待への行動結果に対する親の反応尺度(「サポート反応予期(8項目)」「落胆反応予期(9項目)」の2下位尺度、合計17項目)を一部修正し用いることとした。具体的には、項目の「親」という文言を「コーチ」、「チームメイト」に修正を行った。また同項目に対して複数回回答しなくてはならないことから調査協力者への負担軽減を理由に各下位尺度から因子負荷量(.70以上)が高かった4項目をそれぞれ精選した。したがって、保護者のサポート反応予期(4項目)・落胆的反応予期(4項目)、コーチのサポート反応予期(4項目)・落胆的反応予期(4項目)、チームメイトのサポート反応予期(4項目)・落胆的反応予

期(4項目)、合計24項目で構成されている。回答は、「いいえ(1点)」、「どちらかといえばいいえ(2点)」、「どちらかといえばはい(3点)」、「はい(4点)」の4段階で評定するものであった。

3-2-5. 競技不安

スポーツ競技特性不安尺度(橋本ほか、1986)を用いた。この尺度は、試合前になると不安感情をどの程度感じるのか、その傾向を測定するものである。具体的には、「精神的動揺(5項目)」「勝敗の認知的不安(5項目)」「身体的不安(5項目)」「競技回避傾向(5項目)」「自信喪失(5項目)」の5下位尺度、25項目から構成されている。項目に対する回答は、「めったにない(1点)」から「いつもある(4点)」の4段階で評定するものである。

3-3. 倫理的配慮

調査内容に関しては、共同研究者2名、中学校運動部活動において顧問経験のある現職教員1名、そしてスポーツ心理学を専門とする大学院生3名と協議を重ね、特に対象者の人権を侵害するような事柄について十分に審議し、そのような内容が調査に含まれていないことを確認した。そして調査実施に際して、学校長ならびに各チームのコーチに調査内容を説明した後、調査実施に問題がないかを確認してもらい、調査協力への承諾を得た。調査対象者への倫理的配慮として、各チームのコーチより調査票への回答・協力は任意であること、得られたデータは研究以外の目的で使用されないこと、無記名形式で実施されること、また調査への協力に承諾した後でも随時撤回することが可能なことなどについて説明された。さらに調査票の表紙には、調査への回答は強制的ではなく途中であっても辞退できること、中断しても不利益が被ることは一切ないこと、個人情報特定されないID番号に変換されることを記し、全ての項目への回答をもって同意取得と見なした。なお、第1著者が所属する大学の倫理ガイドに沿って進められた。

3-4. 仮説モデル

運動部活動を取り巻く環境要因を形成する重要な他者としてコーチ、チームメイト、そして選手の保護者の3者に着目した。この3者がつくる動機づけ雰囲気(コーチに関する下位尺度:「コーチの練習支援」「コーチの能力志向」、チームメイトに関する下位尺度:「協調」「承認」「競争」、保護者に関する下位尺度:「低努力-成功雰囲気」「心配-不安雰囲気」「学習志向雰囲気」)ならびに期待への行動結果に対する周囲の反応を独立

変数とし、競技不安を従属変数とした仮説モデルを設定した(図1)。

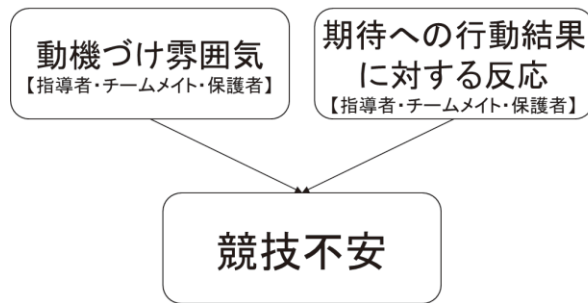


図1 仮説モデル

3-5. 統計解析

運動部の動機づけ雰囲気各下位尺度ならびに期待への行動結果に対する周囲の反応に関する各下位尺度を独立変数、競技不安を従属変数とした仮説モデルについて中学生と大学生それぞれに対し、共分散構造分析を実施した。モデル採択の判断には、CFI (Comparative Fit Index)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を採用した。また、それらの尺度の基本統計量(平均値と標準偏差)を中学生と大学生で比較するために *t* 検定を行った。なお全ての分析には、統計パッケージの IBM SPSS Statistics 24.0 ならびに IBM SPSS Amos 24.0 を使用し、有意水準は 5%未満とした。

4. 結果及び考察

4-1. 中学生と大学生の各尺度得点の比較

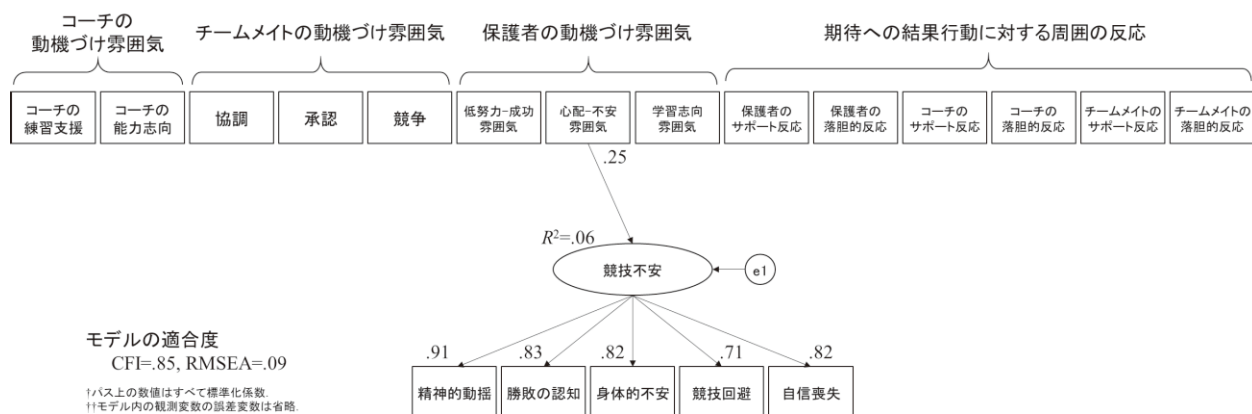
分析に先立ち、各下位尺度の平均値ならびに標準偏差を群(中学生と大学生)ごとに算出し、それらの得点を *t* 検定により比較した。分析の結果、コーチおよびチームメイトの動機づけ雰囲気では、「コーチの練習支援」の得点が大学生(17.13点)よりも中学生(17.99

表1 中学生と大学生の各尺度得点比較

	中学生 (n=92)		大学生 (n=378)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
コーチおよびチームメイトの動機づけ雰囲気					
1. コーチの練習支援	17.99	3.13	17.13	4.37	2.16 *
2. コーチの能力志向	12.23	3.66	12.39	4.24	-0.38
3. 協調	17.42	3.71	16.67	4.03	1.64
4. 承認	18.30	3.21	17.72	3.91	1.51
5. 競争	16.09	2.96	16.62	4.12	-1.42
保護者の動機づけ雰囲気					
6. 低努力-成功雰囲気	7.30	3.47	9.10	4.49	-4.18 *
7. 心配-不安雰囲気	10.51	4.04	12.08	4.91	-3.20 *
8. 学習志向雰囲気	18.79	3.50	19.56	3.83	-1.75
期待への行動結果に対するコーチ、チームメイト、保護者の反応					
9. 保護者のサポート反応	9.64	2.15	10.12	2.64	-1.61
10. 保護者の落胆的反応	9.68	2.01	9.98	2.43	-1.09
11. コーチのサポート反応	9.78	2.11	9.95	2.54	-0.64
12. コーチの落胆的反応	9.90	2.15	10.21	2.45	-1.11
13. チームメイトのサポート反応	10.33	2.07	10.90	2.35	-2.14 *
14. チームメイトの落胆的反応	10.24	1.72	10.80	2.37	-2.57 *
競技不安					
15. 精神的動揺	10.04	3.57	10.07	3.72	-0.05
16. 勝敗の認知	12.42	3.90	11.59	3.68	1.93
17. 身体的不安	9.03	3.77	9.34	3.98	-0.67
18. 競技回避	8.79	3.87	8.68	3.74	0.26
19. 自信喪失	12.09	4.17	10.85	4.19	2.53 *

**p* < .05

点)の方が有意に高値であることが確認された。保護者の動機づけ雰囲気では「低努力-成功雰囲気」および「心配-不安雰囲気」の得点が中学生(順に 7.30 点、10.51 点)よりも大学生(順に 9.10 点、12.08 点)の方が有意に高値であることが確認された。続いて、期待への行動結果に対するコーチ、チームメイト、保護者の反応では、「チームメイトのサポート反応」および「チームメイトの落胆的反応」が中学生(順に 10.33 点、10.24 点)よりも大学生(10.90 点、10.80 点)の方が有意に高値であることが確認された。最後に、競技不安では「自信喪失」が大学生(10.85 点)よりも中学生(12.09 点)の方が有意に高値であることが確認された。



モデルの適合度
CFI=.85, RMSEA=.09

††以上の数値はすべて標準化係数
††モデル内の観測変数の誤差変数は省略

図2 運動部活動における動機づけ雰囲気および期待への行動結果に対する反応と競技不安の関係(中学生n=92)

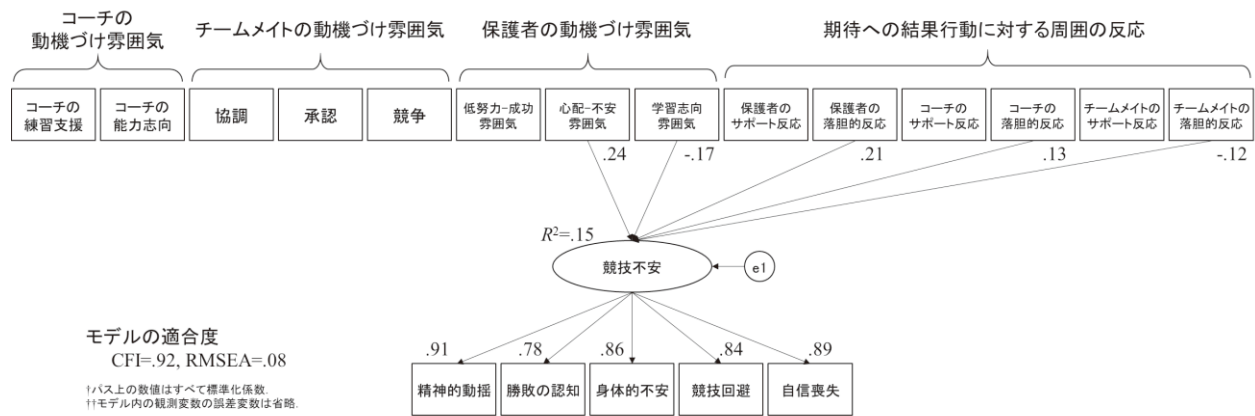


図3 運動部活動における動機づけ雰囲気および期待への行動結果に対する反応と競技不安の関係(大学生n=378)

4-2. 中学生のモデル検証結果

図2は、中学生の運動部活動における動機づけ雰囲気および期待への行動結果に対する反応と競技不安の関係について共分散構造分析を行った結果である。分析の結果、モデルの妥当性を示す適合度は CFI=.85、RMSEA=.09 であり、概ね良好な値であることが確認された。説明力を示す決定係数 (R^2) は $R^2=.06$ を示した。モデル内のパスについてみると、競技不安に対して、保護者の動機づけ雰囲気の「心配-不安雰囲気」が有意な正の影響 ($\beta=.25$) を示した。これは選手が保護者からの「心配-不安雰囲気」を強く認知している者ほど、試合前における競技不安も高くなることを示唆している。

4-3. 大学生のモデル検証結果

図3は、大学生の運動部活動における動機づけ雰囲気および期待への行動結果に対する反応と競技不安の関係について共分散構造分析を行った結果である。分析の結果、モデルの妥当性を示す適合度は CFI=.92、RMSEA=.08 であり、概ね基準をみたす値が得られた。説明力を示す決定係数 (R^2) は $R^2=.15$ を示した。モデル内のパスについてみると、競技不安に対して、保護者の動機づけ雰囲気の「心配-不安雰囲気」が有意な正の影響 ($\beta=.24$) を示し、「学習志向雰囲気」が有意な負の影響 ($\beta=-.17$) を示した。さらに期待への行動結果に対するコーチ、チームメイト、保護者の反応の「保護者の落胆的反応 ($\beta=.21$)」と「コーチの落胆的反応 ($\beta=.13$)」は有意な正の影響を示し、「チームメイトの落胆的反応 ($\beta=-.12$)」は有意な負の影響を与えることが確認された。

これらを整理すると、親が試合や日々の練習に対して過度に心配し、不安に思っていることを選手が察知することで、試合前の不安傾向を増強させる可能性があることが示唆された。さらに期待に応えることがで

きなかった場合、特に親やコーチが落胆するのではないかと考える選手ほど、競技に対して不安に思う傾向が強いことも示唆された。一方で親の学習志向雰囲気(努力によるスキル向上や新たなスキル習得に対して親がどの程度満足しており、喜んでいるのかに関する選手の認知)やチームメイトの落胆的反応(選手が期待に応えることができなかった場合に仲間が落ち込む)は、選手の競技不安を弱める傾向があることが示唆された。

5. まとめ

本研究では、中学生と大学生の運動部活動における動機づけ雰囲気の認知ならびに選手を取り巻く周囲からの期待に対する反応が競技不安に与える影響について検討を行った。その結果、中学生では、「心配-不安雰囲気 ($\beta=.25$)」が競技不安に有意な正の影響を示すことが明らかとなった。一方、大学生では、競技不安に対して、「心配-不安雰囲気 ($\beta=.24$)」、「保護者の落胆的反応 ($\beta=.21$)」、そして「コーチの落胆的反応 ($\beta=.13$)」が有意な正の影響を示し、「学習志向雰囲気 ($\beta=-.17$)」と「チームメイトの落胆的反応 ($\beta=-.12$)」が有意な負の影響を示すことが明らかとなった。

【参考文献】

- Ames, C. and Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267.
- 安藤美華代 (2018) 学校運動部活動指導者の心理的負担感と対処に関する検討. *岡山大学教師教育開発センター紀要*, 8, 45-57.

- 有富公教・外山美樹 (2017) スポーツ競技児童思考尺度の作成および妥当性の検討—競技中に生じる思考の個人差の理解に向けて—. *スポーツ心理学研究*, 44 (2), 105-116.
- 橋本公雄・徳永幹雄・多々納秀雄・金崎良三・梅田靖次郎 (1986) 競技不安尺度に関する研究 (3) —特性不安尺度の信頼性・妥当性について—. *スポーツ心理学研究*, 13 (1), 48-51.
- 橋本公雄・徳永幹雄・多々納秀雄・金崎良三 (1993) スポーツにおける競技特性不安尺度 (TAIS) の信頼性と妥当性. *健康科学*, 15, 39-49.
- 井上則子 (2010) 中学生の運動部活動を支える母親の心理. *津田塾大学紀要*, 42, 119-133.
- 伊藤豊彦 (2001) 高校生における運動部の動機づけ構造の認知に関する研究. *運動心理学の展開*. 遊戯社, pp. 148-162.
- Lavoi, N. M. and Stellino, M. B. (2008) The relation between perceived parent-created sport climate and competitive male youth hockey players' good and poor sport behaviors. *The Journal of Psychology*, 142(5), 471-495.
- 森年雅子・伊藤豊彦 (2010) スポーツにおける目標志向性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響. *島根大学教育学部紀要 (教育科学)*, 44, 49-57.
- 西田保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理論の展望. *総合保健体育科学*, 31 (1), 5-12.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2019) 運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係—中学生と大学生の特徴について—. *健康科学*, 41, 51-58.
- 中須賀巧・阪田俊輔・田中輝海 (印刷中) 中学校運動部活動における選手が認知する保護者による動機づけ雰囲気が競技不安に与える影響. *兵庫教育大学研究紀要*, 56.
- 早乙女誉・山田陽介・森原徹 (2016) 女子プロ野球選手の職務満足感および目標志向性と競技特性不安の関係. *Japanese Journal of Elite Sports Support*, 7, 1-10.
- Seifriz, J. J., Duda, J. L., and Chi, L. (1992) The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 14, 375-391.
- 高野健文・城仁士 (2005) 自己効力感と競技不安から見た競技パフォーマンスの心理モデル. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 13 (1), 71-78.
- 津田恭充 (2013) 競技不安の促進・低減要因—バスケットボール選手を対象とした調査—. *愛知学泉大学・短期大学紀要*, 48, 105-111.
- 渡部雪子 (2013) 期待への行動結果に対する親の反応についての予期尺度作成の試み. *立正大学心理学研究所紀要*, 11, 67-73.
- 渡部雪子・濱口佳和・新井邦二郎 (2014) 中学生における親の期待の認知と外的適応との関連. *カウンセリング研究*, 47 (3), 127-136.
- White, S. A., Duda, J. L., and Hart, S. (1992) An exploratory examination of the parent-initiated motivational climate questionnaire. *Perceptual and Motor Skills*, 75, 875-880.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

